

# 「達磨さま」

平成21年 10月 第3週放送

けさ  
今朝は、ダルマさまのお話をいたします。

先日行われた選挙のニュースの中で事務所に飾られたダルマさんや、当選者がダルマさんに目を入れるシーンが多く見られました。また、一月に高崎<sup>たかさきし</sup>市で開催させるダルマ市では、縁起物<sup>えんぎもの</sup>として町を賑<sup>にぎ</sup>わせている、あのダルマさんです。

ご存じの方もたくさんいらっしゃると思いますが、

ダルマさまは、正式<sup>せいしき</sup>には、菩提達磨<sup>ぼだいだるま</sup>といい、歴史上<sup>れきしじょう</sup>の、それも曹洞宗<sup>そうどうしゅう</sup>にとっては、欠くことのできないお釈迦<sup>しゃか</sup>さまから数えて二十八代目の人物<sup>にじゅうはち</sup>です。

これから、達磨さまについて伝えられているエピソードを基<sup>もと</sup>にお話したいと思います。

南インドの王国の第三王子<sup>だいさん</sup>として生まれた達磨さまは、お釈迦<sup>にじゅうしち</sup>さまから二十七代目の般若多羅尊者<sup>はんによたらそんじや</sup>の弟子<sup>でし</sup>となり出家<sup>しゅっけ</sup>をしました。

その後、般若多羅尊者<sup>せいしき</sup>の正式<sup>せいしき</sup>な跡<sup>あと</sup>を継いで、国中<sup>せっぽう</sup>を説法<sup>せっぽう</sup>してまわり、六世紀初めの頃、中国の梁<sup>りょう</sup>という国に渡り、武帝<sup>ぶてい</sup>という皇帝<sup>こうてい</sup>に会いました。そこで有名な禅問答<sup>ぜんもんどう</sup>が行われたのです。

武帝との問答<sup>あと</sup>の後、達磨さまは、揚子江<sup>ようすこう</sup>を渡り、崇山<sup>すうざん</sup>の有名な少林寺<sup>しょうりんじ</sup>にて、九年間<sup>くねんかん</sup>ひたすら壁<sup>かべ</sup>に向かって坐禅をし続けた、と言われております。

ある日、慧可<sup>えか</sup>という弟子が坐禅を続ける達磨さまに「私はいま、安らぎを得ていませんので、何とか心の安らぎ<sup>やす</sup>を得たいのです。」と願い出ると、達磨さまは「ではその心<sup>え</sup>を持ってこい。」といました。

おどろいた慧可は心を探しますが、「心はとらえようがないので、もってくることはできません。」

すると達磨さまは「これできみは、心が安らぐことができた。」とお答えました。

心とは何かをよく観察<sup>かんさつ</sup>してこいと言うわけです。実体<sup>じったい</sup>のない心を坐禅という修行によってとらえ、安らぎを得ることを示されたのです。

中国に坐禅という、正式な修行を伝えた達磨さまは、十月五日に亡くなられたとされています。その日、大本山<sup>だいほんざん</sup>などの曹洞宗のお寺では、達磨さまの徳を偲び「達磨忌」という法要<sup>しのだるまき</sup>を営<sup>ほうよう</sup>みます。

達磨さまのご生涯<sup>か</sup>については分からないことや伝説がたくさんありますが、曹洞宗にとっては欠かせない人

物であったことは間違いありませんし、お釈迦様の二十八代目の正式な跡<sup>あと つ</sup>を継ぎ、禅を中国に伝えたことも間違いありません。曹洞宗の教えは、お釈迦さまから達磨さまへ、そして道元<sup>どうげんぜんじ</sup>禅師、瑩山<sup>けいざんぜんじ</sup>禅師へと伝えられた教えであります。

その教えの中心は、坐禅です。是非、お近くのお寺で、達磨さまの伝えた坐禅を体験してみませんか。